菖蒲往還の町場 ～原市～

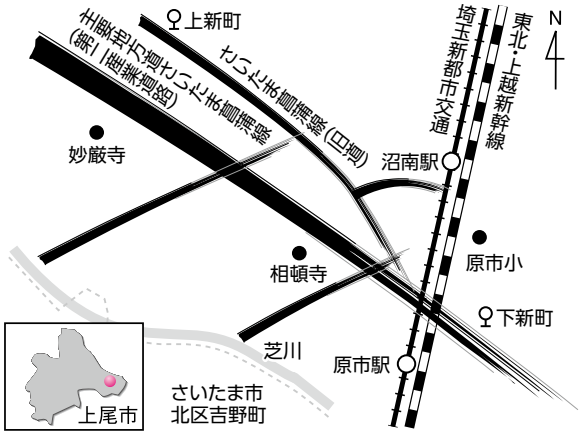

写真１　明治時代の原市の街並み。写真中央に馬車が見られる（1908年撮影）

写真２　写真１と同じ場所の現在の様子

上尾市の東部を南北に縦断するさいたま菖蒲線（旧道）は、古くから「菖蒲往還」と呼ばれる主要な道であった。さいたま市方面から菖蒲往還の両側に町並みが続き、朝日バスのバス停「下新町」の辺りから、「ぐるっとくん」のバス停「上新町」付近までが原市の町場として栄えていた。ただし「原市」は江戸時代になってからの地名であり、それまでは「原宿」と呼ばれていた。

さいたま市北区吉野町は、かつては吉野原村といい、現在の原市地域も含まれていた。吉野原村を通る菖蒲往還沿いに宿場が形成され、吉野「原」村の「宿」として「原宿」と呼ばれた。その後、宿場の道沿いで市が立つようになり、吉野「原」村の「市」として「原市」と呼ばれるようになったという。

永禄十（1567）年9月「北条家印判状（平林寺文書）」では、原宿の代官職を平林寺の泰翁宗安に命じたとあり、同年12月に検地を行った『原宿検見書出（平林寺文書）』でも「原宿」という地名を使っている。

江戸時代前期頃、慶安三（1650）年の『武蔵田園簿』では、「原宿村」という記述があるが、元禄十五（1702）年の『元禄郷帳』では、「原市村」は「原宿」ともあり、両方の呼び名が見られる。また確実な年代が分かる資料ではないが、『新編武蔵風土記稿』によると、寛永二十（1643）年の文書には「原宿」と「原市」の両方が使用されているという記述がある。このことから、少なくとも江戸時代初めには「原市」という呼称が使われていたことが分かる。

江戸時代以降、市は賑わいを見せはじめ、文化・文政年間（1804～30年）頃から世間に広まっていった。この町場では、道路に面した家のニワ（庭）と呼ばれる約3間の空間を利用し「市」が立った。月に6回、3と8が付く日に市が立ち「三・八の六斎市」と呼ばれた。市では米や麦、白木綿などの生産物が取引され、明治（**写真１**）から大正時代にかけて最盛期を迎えた。

大正時代末頃まで盛んに開かれていた市は、流通の変化などに伴い、昭和に入り幕を閉じた。市の名残は少ないが、道路から少し引いて建てられた建物に、わずかに当時の面影が残っている（**写真２**）。

（上尾市生涯学習課）

コラム column　だるま市と雛市

定期的な市とは別に、季節的な物を扱う市も開かれた。

現在建物はないが、かつて相頓寺の北にあった金毘羅神社では、例年「金毘羅様」という祭日に、だるま市が開かれていた（**写真１**）。だるま屋の他に、菓子屋や玩具屋なども出店していた。だるま屋は岩槻から、菓子屋は大宮などから来ていた。だるま市に来る人は、古いだるまを金毘羅神社の祠の周囲に納めて、新しいだるまを買い求めた。新しいだるまは、毎年少しずつ大きい物にしたという。

3・5月の節句の前には、雛市も開かれていた（**写真２**）。地元の商人の他にも、人形の町として有名な岩槻や鴻巣からも人形屋が出店していた。しかし、戦後になると縮小されていき、昭和35年頃からは人形屋が出店しない雛市となった。金魚屋が多く出店した時期には「金魚市」、植木中心になったときには「植木市」と、呼び名を変えていった雛市は、庭を紅白の幕で囲って飾り、とても華やかであったという。

写真１　だるま市（昭和51年撮影）

写真２　雛市（昭和51年撮影）